

女子大生における不安現象の分析に 関する基礎的研究

福田 啓子*・平井 富雄**

(平成3年9月30日受理)

A Study on the Anxiety Phenomenon in Young Female Student

Keiko FUKUDA and Tomio HIRAI

(Received September 30, 1991)

はじめに

本研究は、女子大生の抱える不安現象を分析することにより、彼女らの当面する問題、その他適応様式を明らかにし、人間関係や心身の健康などの相談活動において、どのようなアドバイスをを行うべきかの、一つの示唆を得ようとするものである。

不安現象をいかにとらえよう(把握)とするかについては、従来、人間の不安を病的なものと正常なものに分類する概念規定を前提として、これに基づいた質問紙法による不安尺度測定の方法を用いることが主流となっている(Taylor, アングレラテスト)。

不安現象は、人間固有のものであり、それ自体を個々の人間が、個別反応、あるいは、行動として示している(精神病、障害者を除く)。通常の社会生活を行っている健全者に関する行動学的、あるいは、既成概念に基づく質問紙による心理テストによって不安現象をとらえることは、人間の基本的心理の一つである不安現象そのものを形相化し、簡単に不安を処理しようとする欠陥を免れえないと考える。

質問紙法におけるテスト項目の意味を被験者がどのように理解し、答えるかということを考えると、テスト項目が多すぎるか、内容が曖昧なため、結果が客観的数字として表現されるものの真の不安現象は把握し難い場合が多い。

近年、能力や態度など、人間の心的現象の特性を測定するためのテストや質問紙は、一般には、多くの項目によって構成されている。そして、それらの項目は、その困難度(質問紙の場合、“ハイ”と答える度数)や、測

定との相関関係の強さなどについて、それぞれ異なる特性を持っている。すなわち、青年期の学生の持つ、心的不安現象を、質問紙によって行うとすれば、質問項目に著しく簡略化が行われると同時に、真の不安現象自体は項目特性によって規定することによる危険が多いといえる。

従って、今回は上述のことも考慮しながら、不安現象をとらえるための基礎的な資料を得ることを目的とし、以下に述べる方法により、本学の一般学生を対象としてレポートを求め、不安に焦点をあわせ若干の分析を試みた。

ここでは、その得られた結果について報告する。

方法

1. 調査対象

本学学生 97名 いずれも学部2年生(20~21才)各コースの学生をそれぞれ1割程度無作為に選ぶ。

2. 調査期間

1989年 10月

大学生生活2年目になり、友人関係や学園生活においても、比較的安定し、また将来への選択にも目が向けられてきた時期と言える。

3. 調査内容

「現代における若者の人間関係について」というテーマで、自分の感じていることや思っていることを自由に記述させる。レポートの枚数は制限せず、また、内容の規制も加えなかった。

4. 分析方法

① タイプ別分類

レポートの中から、文章表現、文章内容、論理構

* 児童学科 ** 心理教育学科

成などを一括して、精神医学面接と同様に、学生の不安現表が、どのように表現されているかの分析を行う。その結果、図1に示すように、4つのタイプの不安特性が抽出された。

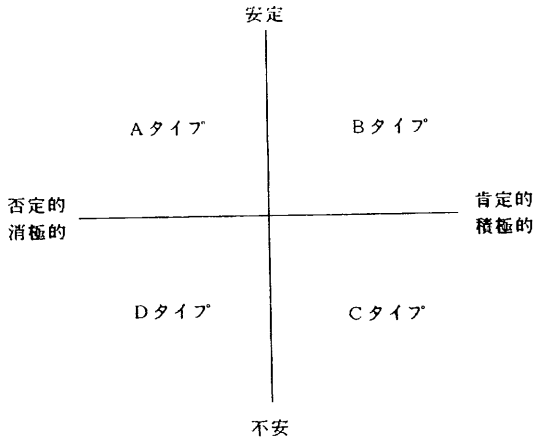


図1 不安特性の構造

- Aタイプ：特に不安感は見られず、現在の生活に満足している。学園や社会、友人関係に対する肯定的関心は薄い。
- Bタイプ：現在の若者の人間関係については、批判的であるが、不安感は比較的少ない。友人関係における深い結びつきを求めている姿勢がみられる。自分と社会との関わりは肯定的に受けとめている。
- Cタイプ：友人関係において漠然とした不安を感じているが、自己を変えていこうとする姿勢、新しい人間関係へに肯定的関心が高い。
- Dタイプ：不安感が比較的高く、学生生活や友人関係に消極的であると同時に、悲観的であり、逃避の態度がみられる。

② 不安的要素の分類

次に、①に示した各タイプ(A, B, C, D)ごとに、そのタイプの決定要因となりうる不安内容を抽出した結果、以下のような分類を行った。

- a：友人との関わり方について
- b：友人の行動様式について
- c：友人の性格や態度について

d：その他

なお、分析にあたっては各レポートごとに、研究者2名がそれぞれいかなる不安現象や不安特性を有するかということについて意見を交換し、それが完全に一致するまで検討を行った。

結果および考察

図2は、個々の学生をタイプ化し、その割合を示したものであり、表1は、各タイプごとの不安的要素とその割合を示したものである。ここでは、これらの図、表を中心に、レポート内容の具体的記述にふれながら、各タイプの特徴や不安の特質について検討していく。(なお、レポート内容が明らかに偽装しているようなものは分析対象から省いた。)

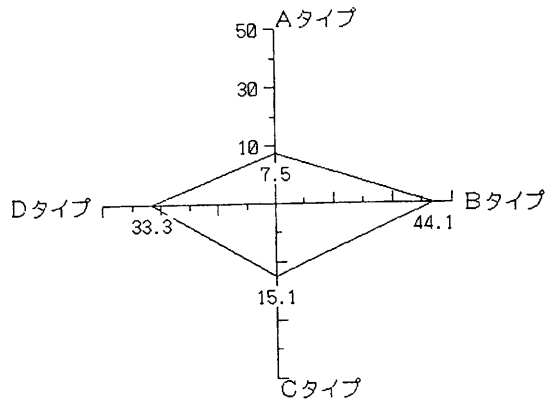


図2 コースごとのタイプ分布図

全体的には、B, Cタイプ、すなわち人間(友人)関係や社会(学園)生活に対する積極的姿勢がみられる学生が、それぞれ44.1%, 15.1%と両者あわせて、半数以上を占めている。一方、逆に消極的、拒否的姿勢が見られるのがAタイプ(7.5%), Dタイプ(33.3%)であるが、特にDタイプでは不安度も多くみられ、今後の検討課題である。

これらの各タイプについて、具体的内容から不安現象や不安特質を見てみると、まずAタイプでは、現在の友人関係や学園生活において、不安感や危機感ほとんどみられず、例えば、表1における不安的要素 a(友人との関わり方について)では、「いいかげんなもの」

「表面だけのつきあい」であるとしながら「その方が腹もたないし、非常によい」「楽である」「昔よりお互いが親しみやすく、人間関係は暖かいと思う、現代の方が好きである」といったように、現在のつきあい方に、何も不都合なことではなく、むしろ自分にとって都合のよい関係であるとしている学生が多い。また、学園生活においても「大学での友人は、互いに信頼しあい、愛情を持って接していると思う。」「今、かけがえのない出合によって様々な友達と巡り会い、学校生活を送っている」といったように、友人同志の強いつながりを感じているようであり、積極的に働きかけていく姿勢はみられない。

Bタイプでは、内容的には、現代の一般的若者に対する批判や問題点などが最も多くみられたが、文章表現では、自分自身の問題としてではなく、不安度はそれほど高くはないように受けとめられる。表1のa(人との関わり方)では、「見せかけだけの関係だと思う」「広く浅い関係が主流」「友達はたくさんいるけど親(真)友と呼べる人はほとんどいないのでは」といったように、表面的なつきあい方であると考え、b(行動様式)では、「個人行動が苦手な団体で行動するものが多い」といったグループ行動、c(性格や態度)では、「友達は多いものの結局は孤独と結びつく」「大学生になってようやく人を正視できるようになった。自分一人ということに気づいた。」など若者の(自分を含めて)孤立化や孤独化を指摘している学生が多く、「自分が良ければいいという人が増えている」といった自己中心的、反対に「みんなと合わせてしまう。主体性に欠けている」、さらに、「最近の事件は、若者の人間関係の一端を表している」「凶悪犯罪など、現代の無意識病(あまり深く与えない人)が多い」といったように病的な人間としてとらえている学生が多くみられるのが特徴である。そして、こういった若者のあり方については、「積極的にいろいろな人とつきあってお互いに学びあい心をわかちあえるつきあい方ができれば幸せなことではない」「人は社会の中で一人では生きて行けないのだから、助け合い、励ましあって生きていくことが重要である」「人間には、善というものを持ち合わせているから、心の底から悪い人は絶対にいない。善のそんざいを信じてそれを支えに生きていくように思う」「自分について振り返り人間らしさを求めていく時代かも知れない」「青年期は、人間関係の幅を広げたりして、豊かな心を創り出すことがすば

らしい人生を送るためにも、ぜひ必要であると感じている」など、人間関係の希望的、理想的あり方についての意識は高い。

表1 各タイプごとの不安的要素の分類

	a 関わり方		b 行動様式		c 性格・態度		d その他		合計 人数
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
Aタイプ	4	57.1	---	---	---	---	---	---	4
Bタイプ	14	34.1	8	19.5	16	39.0	3	7.3	41
Cタイプ	11	78.6	5	35.7	6	42.9	---	---	22
Dタイプ	18	58.1	2	6.5	11	35.5	2	6.5	33
合計	47	50.5	15	16.1	33	35.5	5	5.4	100

次に、Cタイプは、Bタイプと同様不安的内容や人間関係に積極的姿勢がみられるのが、このタイプの特徴は、自分自身が感じている不安が強く、この不安に対して、何らかの改善を試みようとする事である。例えば、「人間関係において、何よりも重要な信頼関係が確立されていない。大学生になった今がいちばんつまらない。今の様な世の中では、対人関係にも用心せざるをえない、この寂しい人間関係をなんとかすべき、自己中心の姿を少し変えて、全体を客観視できる心のゆとり(余裕)を持ちたいものである」「ある種以上という人間が生み出されている。核家族や受験戦争の中で、人間不信不振になっている。人間同士のふれあいを取り戻さない限り、人間としての役割を果たさなくなっていくのではないかと不安にかられる。同じ気持ちを持ち、お互いが忠告したり、助言できるような友達をつくっていきたい」「人にあわせて行動することが多く、自分のペースというものがなく、持つことのなくなっているのではないかと不安になる。豊かに思いやりを持つような人間関係をつくっていきたい」「大学に入って交友関係は広がったが、深さは薄れた感じがする。またつきあいうまくなくなったが、昔のように本音は言えなくなった。友人の本当の人間柄や本音がよくわからないというのは、ある時ふと不安になる。クラブ活動によって友人を得られたが、これからも他人を思いやる気持ちが必要であろう」「他人に対して無関心、無感動ということが多く、未来に対して、このような人間関係になるのは恐ろしい。心の底から話せることが大切である」「うわべだけのつきあいでは寂

しすぎるから、出会いを大切にしたい」「自分が良ければいいという傾向が多い。情報があまりにも多く、どうしていいか解らないところもある。社会が複雑で役割も多様化され、さらに混乱していきだろう。よりよい関係をつくりあげていくためには、お互いが思いやる優しさを持つことが必要である」など、よりよい、より新しい人間関係に向けての自分自身の意欲が感じられる。

Dタイプは、不安感が比較的に高く、学園や人間関係には消極的、拒否的姿勢が見られる。ここでは、その不安的要素がaの友人との表面的な関わり方に集中され、「気が楽ならいい、便利ならいいと言うのが今のつきあいである」「友人ではなく遊人である、インスタントな関係」「人とのつながりの大切さは、徐々に忘れられている」「本音を出さないと表面的な部分でつながっている」といったつきあいに「少し寂しい気がする」「悲しく思う」「寂しいことである」「情けない」といった感情表現がみられるものの、「他人を思う余裕を持っている人が少なく、今の社会では、最も適したつきあい方なのかも知れない」「社会に出れば、人間の輪も広がり、かけがえのないものを見つけられる」「時の流れが人の心を変えていくものである」など、あきらめや仕方のないことといった受けとめ方が多く、さらに「はたして、この大学の友人達と長くつきあっていけるだろうかということ、今、一番強く感じているが、大学の人は、話をする事でさえいやであり、いい加減すぎて相談する気にもなれない。悲しいが、長くつきあう気持ちはない」「人格形成のある要素として、人間関係は大切だと思うが、今のシステムでは、人とのふれあいは減ってくるだろうし、人間関係の透明度がUPしていく気がする」、
「友達が悪の利用として使われている、最も嫌いなのは大学のつきあいである。自分は、現代の悪しき人間関係を持つ代表のように思う」「若者同士の真の関係は存在していないに等しいと思う。最近、ただ生きているだけのようだ」「こんな日本を出て外国へ行きたい」など、友人関係の拒否的態度や逃避的内容もみられる。また、cの性格や態度については、「今の若者は、たくさん人間関係を持ち、多くの人と接する割には孤独である。私のように」「自分だけが信じられるという人が増えている」「最近の事件にみられる若者は私たちと何も変わらない人たちのだ。基本は自己偏重という要素が共通している。この自己偏重主義はこの先ますます強くなっ

ていくだろう」など友人関係の希薄さと同時に社会の中で孤立していくことに不安を感じていることもうかがわれる。

以上、不安現象を中心に、学生の人間（友人）関係を見てきた。一般的に、不安には、健康的な不安と病的な不安に分けられる。前者では、人間である以上、特に青年期においては心が健康であるならば誰でも味わう不安であり、この不安に対しては、努力によって解決してこうとする生命感情が働き、むしろ人間の成長作用をもたらすのである。今回抽出されたBタイプ、Cタイプに見られる不安には程度の差はみられるものの、この種の不安が多く見られ、個々の学生にも不安を克服してこうとする意識が高いこともわかる。

また、Dタイプ（消極的姿勢）においても、できるならば、不安を克服し、改善して行きたいという心情を感じさせる学生がみられるが、現実の生活や関わりの中では、「心と心の人間関係を探し出そうとするが、難しすぎて答が見つからない」「大学生生活は忙しすぎる、友人や先生ともゆっくり話す機会や時間がない」といったことに代表されるように、その方法が解らない、あるいは行動ができないといった理由から努力を回避してしまう傾向がみられる。

一方、病的な不安、神経症などの学生は特に見られなかったが、Dタイプの不安度が高く人間関係に逃避的、悲観的内容がみられる学生に対しては、注目せねばならないであろう。

現代は不安の時代とも言われ、若者にとっても、表面では楽しく、にぎやかな交友関係の中で、実際は空しさや孤独を感じている者も多い。もちろん真の不安は彼女らの現実場面をとらえていかねばならないだろうが、今回の、人間（友人）関係における不安という一つの項目に対して広い範囲にわたっての不安特性や現象を読みとることができたと思われる。そして、これらの結果は、その後の行動や意識変化にも注意をする必要がある。

ちなみに、各タイプ（A、B、C、D）を代表する学生に対して、同一テーマでレポートを試みた結果では（1991年6月）、Dタイプ（不安度も高く友人関係にも消極的）は、内容的にはほぼ同じであったのに対し、A、B、Cタイプでは、前回以上に、不安現象は高くなっていることをつけ加えておく。

現代の女子大生は、交友関係もさることながら、進路選択、学業成績などに関しても、漠然たる不安現象を示

している。少しでも学生が自分自身を見つめなおし、将来へ向けて、今を生きる気力を持つことが大切であり、我々はできる限りの方向付けアドバイスを行わねばならないだろう。その意味においても、今回の結果は、学生指導における一つの手がかりを与えてくれるものであると言えよう。今後、我々は本研究の対象となったレポートを主とし、これに当該、被験者の家庭環境、学業成績あるいはサークル活動、その他の背景適要因とあわせ分析していくつもりである。また、一方では不安現象の不安的表示となりうる生理学的検査（脳波、GSR、血圧等）を加え、今回報告した各類型、および不安の内容そのものが、本学学生に関する限り、心身相関の意味合いにおいて現代女子学生の学園内において問題となる情緒障害、学業不振などを惹起する真の不安であるかどうかということを確認していきたい。

今回の研究は、特定研究費により行った。また、本紀要内容の一部は第58回日本応用心理学会で報告した。

参 考 文 献

- 平井富雄：心のトラブル 中央文庫 1990
平井富雄：脳と心 中央新書 1983
平井富雄：病める心のカルテ 中公文庫 1984
笠原 嘉：不安の病理 岩波出版 1988
桜井図南男：不安精神医学 東京医学書院 1969
福永和豊：精神医学 金原出版 1976
平井富雄：原俊夫、保崎秀夫 精神科治療学 金原出版 1972
大熊輝雄：現代臨床精神医学 金原出版 1983
芝祐順編：項目反応論 東京大学出版 1991年